

時衆と実盛供養の起源

平成十七年(二〇〇五)五月十三日、
時宗総本山清浄光寺(神奈川県藤沢市)

市(の遊行七十四代他阿弥陀仏真円は、多太神社(小松市上本折町)を訪れ、木曾義仲が寄進した斎藤実盛着用と伝えられる兜(国重文)を回向した。



(『金沢市史通史編1』より転載)

歴代上人が、



「遊行縁起」に見える太空の実盛供養(神奈川県立歴史博物館所蔵)

「遊行縁起」は、遊行13代尊明・14代太空・15代尊恵の事績を詞書と絵で描く。この場面は、特に注目される太空の実盛済度の逸話の描写部分。框の付いた台で念仏を説く太空の前に現れた白髪の老人が、実盛の亡霊。「時衆過去帳」の太空条にも、「真阿弥陀仏」(裏書「斎藤別当」)の名が記されている。



遊行上人回向札(上本折町 多太神社所蔵) 歴代の遊行上人が奉納した回向札が、現在も多数保存されている。

奉納した回向札が多数保存されている。

鎌倉時代、新しい念仏信仰普及の担

い手の一人として登場した一遍のあと、

二代遊行上人となった他阿弥陀仏真

教は、正応四年(一二九二)八月、加

賀国今湊(現、白山市湊町)で破戒無

慚にして邪見放逸で恐れられていた小

山律師という武士を教化した。これが

遊行上人による加賀国での最初の事績

として知られる(「遊行上人絵」)。

以後、北陸道沿いの市場・宿場を中

心に、時衆道場が開かれていった。

小松市域では、安宅に二つの道場(相

応寺・宝界寺)があり、三日市で知ら

れる本折などにも時衆が居住していた

ことが、歴代の遊行上人が携帯したと
いう「時衆過去帳」などからわかる。

ところで、遊行上人による実盛回向

の起源は、室町時代の十四代他阿弥陀

仏太空が加賀国に遊行した際のエビ

ソードにあると思われる。

それは、応永二十一年(一

四一四)五月、太空が柴山

潟の西岸潮津(現、加賀市

潮津町)の道場(西光寺)で

布教し、義仲軍の手塚光盛

に篠原で討たれた実盛の亡

霊に念仏を授けて済度した

というものであり、この話

は都にまで伝わり、醍醐寺

三宝院の満済の日記にも記

された。この話をもとにし

て世阿弥元清が猿楽能「実

盛」を作成・上演したため、

さらに広く知られるように

なった。

多太神社の所在地本折は

中世の時衆居住地でもあり、
同社境内から発掘された多

数の中世埋納銭も時衆による実盛供養
の興行銭が奉納された可能性が指摘さ
れていて、遊行上人による実盛回向は
そうした歴史的背景を踏まえることに
もなるのである。(室山 孝)



遊行74代上人真円による実盛供養(平成17年5月13日、多太神社にて) 実盛の兜を回向する遊行第74代他阿弥陀仏真円上人。上人は、参列の市民らに念仏札も配った(賦算という)。この回向は、前回の昭和31年(1956)4月21日、71代隆宝以来、約半世紀ぶりであった。